



C O N T E N T S

平成 27 年度在校生アンケート調査結果 —学生の学習時間に関する分析—	02
平成 27 年度卒業時アンケート調査結果 —満足度に関する分析—	04
開催報告 IR 室・国際部共催ワークショップ	06
開催報告 IR 室・国際部共催交流会	06
コラム「国内における IR 活動の新動向」	06
IR 室活動報告	08

平成 28.9
第3号

本学では、大学全体及び各学部、学科のさらなる教育改善を図るため、新入生アンケート・在校生アンケート・卒業時アンケートを実施しています。IR 室は、学部別・学科別の集計・分析、留学経験の意義、学習経験と就職の満足度、GPA と大学・所属学部・学科への満足度、学習時間と授業経験などの相関関係や規

定要因について様々な分析を行い、学部長会議、理事会等で報告し、学生の学習実態や教育改善のための情報を提供しています。今回は、「平成 27 年度在校生アンケート」及び「平成 27 年度卒業時アンケート」結果の抜粋をご報告します。

平成 27 年度在校生アンケート調査結果 — 学生の学習時間に関する分析 —

一般的に大学において、学生は「1 単位の取得には最大で 45 時間の学習が求められており、総卒業単位（124 単位）（四年制大学の場合）を得るには 1 日 8 時間程度の学習時間を確保しなければならない」ことと定義されていることから、学習時間には大

学教育の状況が端的に表されています。本学における学生の学習時間の実態、また学生の学習時間を確保するためにどのような配慮・取り組みが必要とされているかという観点から学生の学習時間に関する分析結果についてまとめました。

1. 調査概要

- 1) 実施時期：平成 27 年 11 月 16 日（月）～ 12 月 12 日（土）
- 2) 調査対象：全学部・全学科の 1～3 年生、回答者数 6,029、回答率 28.2%
- 3) 調査方法：Web アンケート（ToyoNet-ACE）
- 4) 調査目的：入学時と卒業時のみではなく、各年次の在校生についての学習・生活状況、満足度、要望を把握し、教育改善に必要な情報を得ることを目的

2. 主な結果

図 1.1 の 1 週間あたりの授業など（実験・実習を含む）への出席状況を見ると、学年の上昇とともに出席時間の割合は下がっています。また、「1 週間あたりの授業に関する学習時間（授業の

予習・復習や課題をする）」（図 1.2）は、2 年生が、「授業と関係ない自主的な学習」（図 1.3）は、3 年生がそれぞれ最も学習時間を確保していることがわかります。

図 1.1 1 週間あたりの授業など（実験・実習を含む）への出席

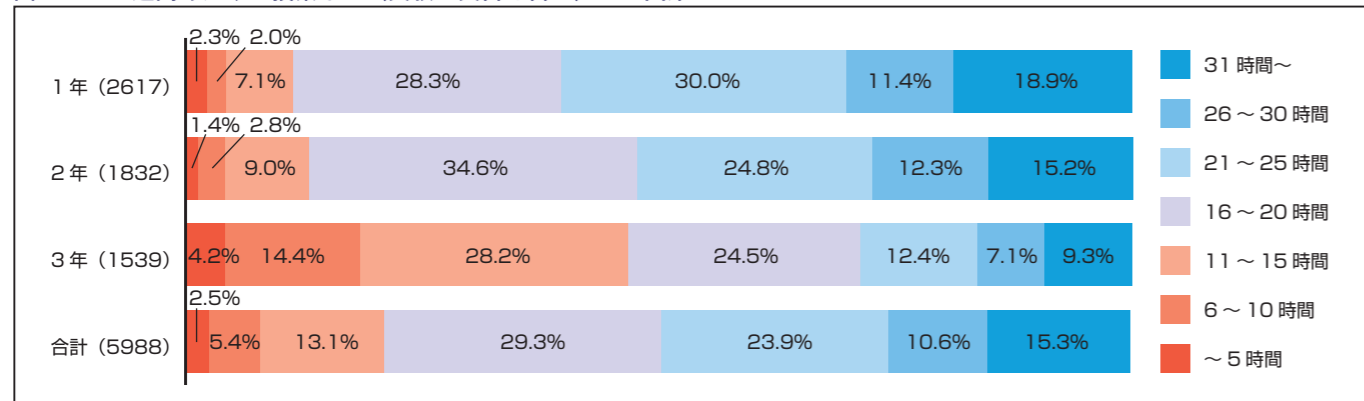


図 1.2 1 週間あたりの授業に関する学習時間（授業の予習・復習や課題をする）

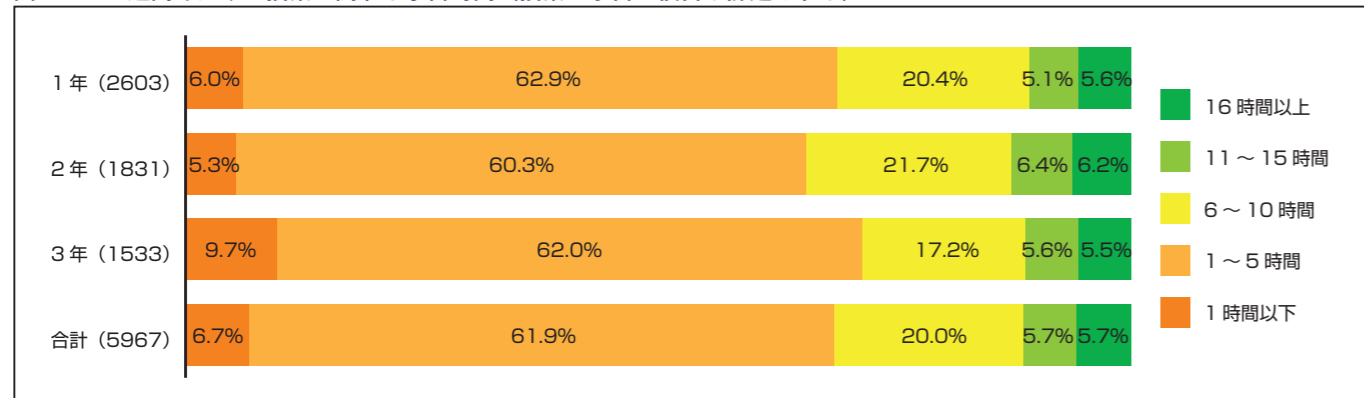
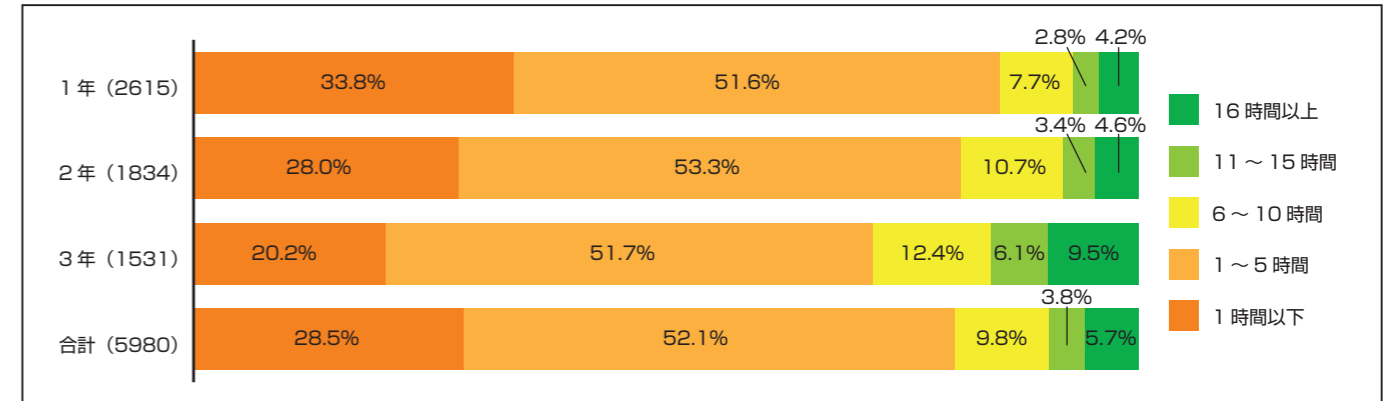


図 1.3 1 週間あたりの大学の授業と関係ない自主的な学習



また、「授業など（実験・実習を含む）への出席」では、「授業の予習・復習や課題をする時間」と「大学の授業と関係ない自主的な学習時間」にいずれも正の相関が見られます（表 1.1）。さらには、「授業の予習・復習や課題をする時間」と「大学の授業と関係ない自主的な学習時間」の間においても、正の相関が確認されました（表 1.2）。すなわち、授業（実験・実習を含む）へ積

極的に出席している学生ほど「授業の予習・復習や課題をする時間」、「大学の授業と関係ない自主的な学習時間」も多く時間を確保しており、また、授業の予習・復習や課題に積極的に取り組む学生ほど「大学の授業と関係ない自主的な学習時間」も長いことが推察できます。

表 1.1 授業などへの出席と学習時間との相関

	授業の予習・復習や課題をする	大学の授業と関係ない自主的な学習
Pearson の相関係数	.256**	.058**
有意確率（両側）	.000	.000
度数	5951	5964

表 1.2 授業の予習・復習や課題をする時間と大学の授業と関係ない自主的な学習

	大学の授業と関係ない自主的な学習
Pearson の相関係数	.365**
有意確率（両側）	.000
度数	5946

さらに、学部別の分析結果では、「授業に関する学習時間（授業の予習・復習や課題をする）」は、一部の理工系学部において長く、一方で、「大学の授業と関係ない自主的な学習時間」は、一部の文系学部において長い傾向が見られました。また、学習時間と授業の形態との関連についての分析から、下記のことが推察されます。①学生が「授業の予習・復習や課題をする時間」を増やすためには、「授業中に自分の意見や考え方を述べる」こと、

また、「期末試験のほかに小テストやレポートなどの課題が出される」こと、「TA などによる補助的な指導がある」こと、「授業内容に興味をわくように工夫されている」ことが有効であり、また、②学生が「大学の授業と関係ない自主的な学習時間」を増やすためには、「授業中に自分の意見や考え方を述べる」こと、「少人数、ゼミ形式の授業」であることが有効です。

3. まとめ

学生の学習時間を増やし、教育の質を高めていくためには、各学部、各学年の学生の学習実態を把握し、講義にとどまらず学生参加型など様々な授業形態を取り入れることが重要であると考えます。また高等教育研究の体制・活動を充実し、本学の学生の学習の状況と国内外大学とベンチマーキングを行い、大学内の教育

改革・改善意識を高めていきます。さらに学生の予習・復習、自主的な学習を促進するために、学生が事前に準備しやすくなるシラバス（授業計画）、体系化されたカリキュラムの整備、授業を補助する TA 制度と図書館機能の充実に一層努める必要があります。

平成 27 年度卒業時アンケート調査結果 —満足度に関する分析—

1. 調査概要

- 1) 実施時期：平成 28 年 3 月 23 日 学位記授与式にて配布・回収
- 2) 調査対象：全学部・全学科の卒業生、回答者数 5,501 名、回答率 91.2%
- 3) 調査方法：マークシート用紙によるマーク及び記述方式
- 4) 調査目的：当該年度に卒業する全学生を対象に、授業・学習全般や大学生活全般、4 年間の成果、大学への満足度などについて把握し、さらなる改革・改善を図っていくことを目的としている。

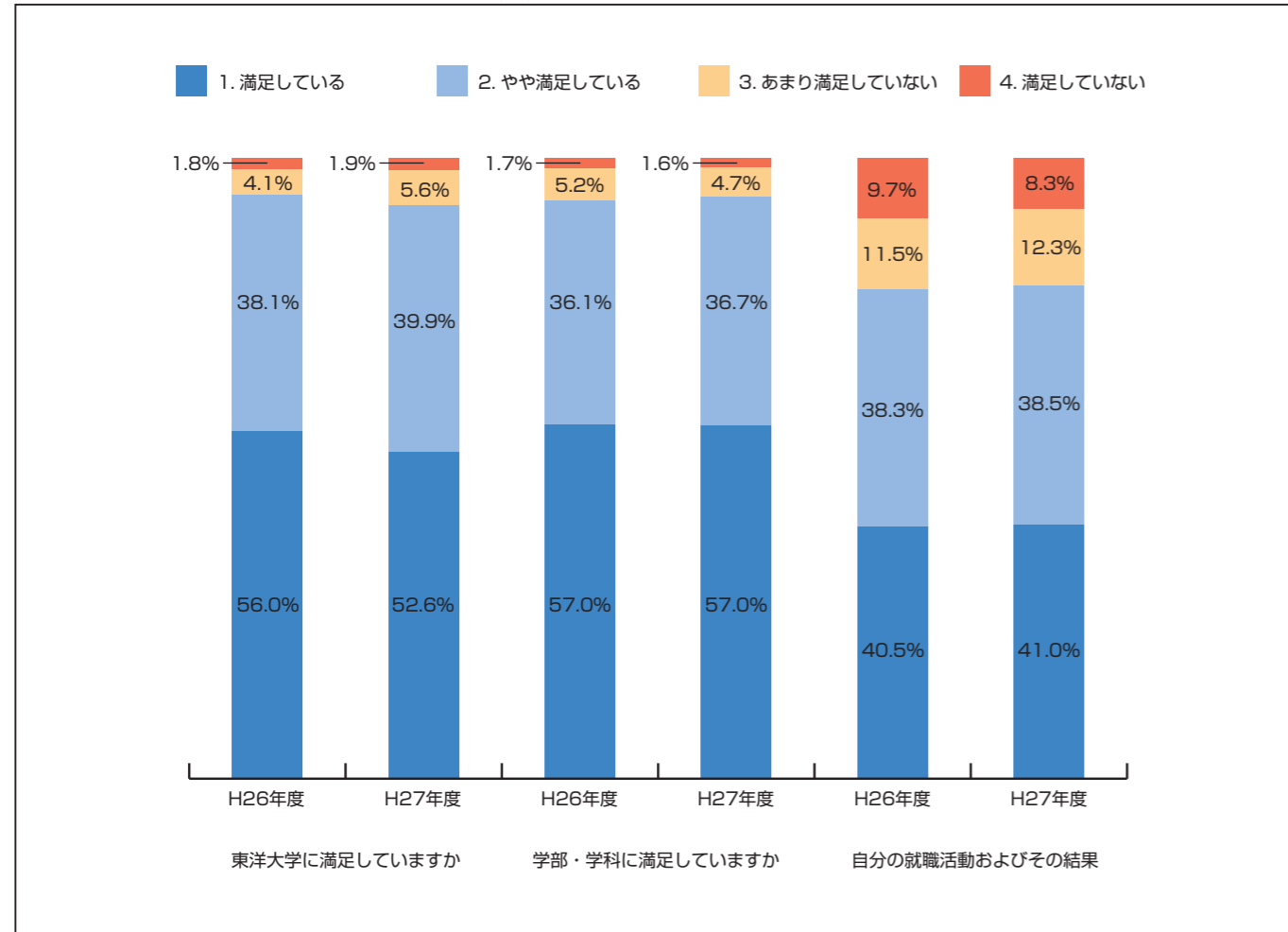
2. 主な結果

ここでは、平成 26 年度及び 27 年度における卒業生の満足度について比較し、また満足度の規定要因の分析結果を報告します。

① 卒業生の満足度

図 1 に示すように、今年度は昨年度とほぼ同じく、「東洋大学」、「学部・学科」への満足度に関して、「満足している」と「やや満足している」の回答は合わせてそれぞれ 9 割を超え、「自分の就職活動およびその結果」に対しては、8 割を超えています。卒業生の満足度は概ね高いという結果となりました。

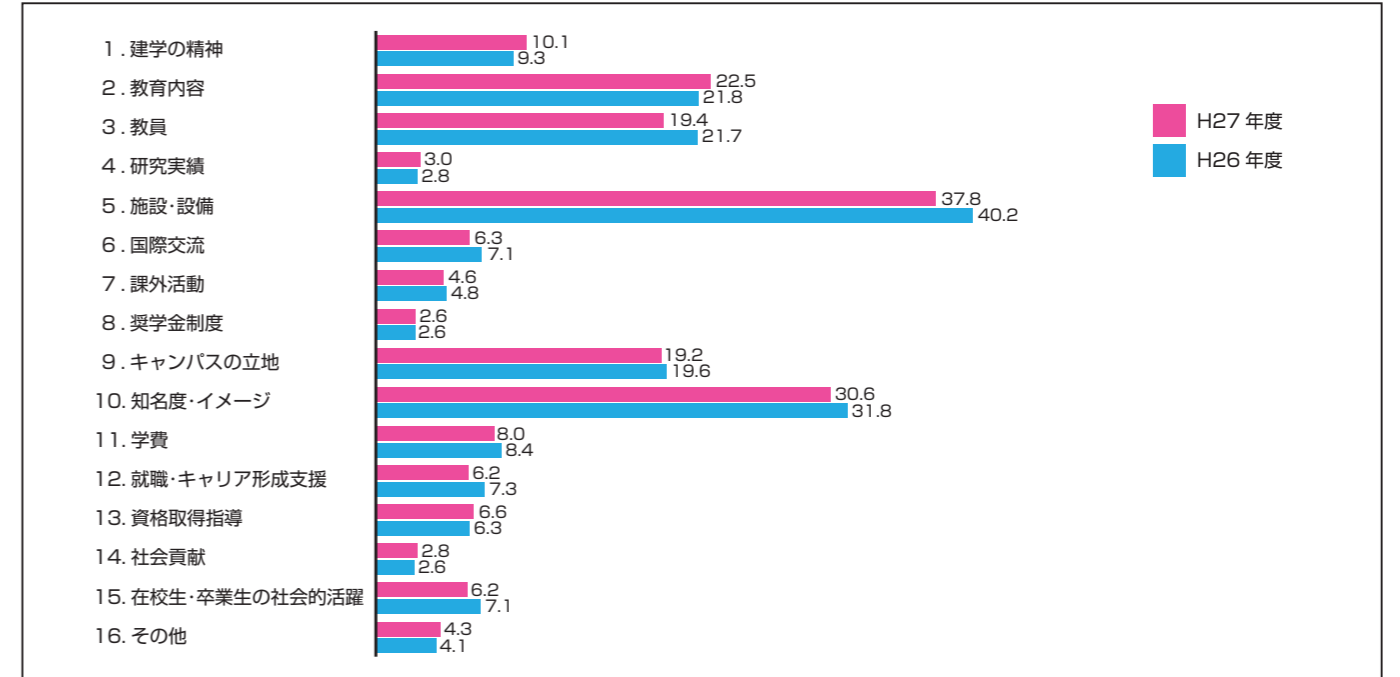
図 1 H26 年度・H27 年度の卒業生の満足度 (%)



しかし、図 2 に示す質問「東洋大学の所属学部・学科で、他の人に誇りを持って薦められる、良い点はどのようなところですか。(複数回答可・3 つまで)」に対する回答では、今年度と昨年度ともに、「施設・設備」・「知名度・イメージ」・「教育

内容」・「教員」などを挙げた割合が比較的高く、「奨学金制度」・「社会貢献」・「研究実績」などに対する評価あるいは認知は低いことがわかりました。これらについては、今後対応を検討する必要があります。

図 2 東洋大学の所属学部・学科で、他の人に誇りを持って薦められる、良い点 (%)



② 満足度の規定要因の分析結果

平成 27 年度のデータに基づき、満足度の規定要因についての分析結果から(表)、「学部・学科への満足度」に対しては、「教育内容」・「教員」・「建学の精神」の規定力がより高く、また、「大学への満足度」に対しては、「教育内容」・「施設・設

備」・「建学の精神」・「教員」の規定力がより高く、さらには「就職活動の結果への満足度」に対しては、「就職・キャリア形成支援」・「資格取得指導」の規定力がより高いことが明らかになりました。

表 満足度の規定要因 (重回帰分析)

	学部・学科への満足度	大学への満足度	就職活動の結果の満足度
(定数)	***	***	***
建学の精神	.100***	.122***	.023*
教育内容	.159***	.143***	.006
教員	.142***	.120***	.004
研究実績	.038**	.033*	-.001
施設・設備	.090***	.131***	-.005
国際交流	.058***	.032*	.027+
課外活動	.049***	.062***	.023+
奨学金制度	.024+	.021*	.008
キャンパス立地	.053***	.066***	.004
知名度・イメージ	.038**	.092***	.023
学費	.050***	.042**	-.035*
就職・キャリア形成支援	.054***	.046**	.067***
資格取得指導	.087***	.075***	.054***
社会貢献	.006	.032**	-.012
在校生・卒業生の活躍	.040**	.067***	-.003
その他	-.036**	-.059***	-.004
調整済み R2 乗	0.074	0.079	0.008
F 値	27.56***	29.75***	3.53***
N	5338	5336	5227

***P<.001 **P<.01 *P<.05+P<.1 注) 回帰係数は標準化されている

3. まとめ

分析結果から、「東洋大学」、「学部・学科」、「自分の就職活動およびその結果」への満足度は概ね高いもの、「奨学金制度」、「社会貢献」、「研究業績」などの点については、今後対応を検討する必要があります。

また「東洋大学」、「学部・学科」、「自分の就職活動およびその結果」に対する満足度に関する規定要因の分析結果から、下記の示唆が得られます。

①「教育内容」、「教員」は、大学への満足度、学部・学科への満足度に大きく関連しています。本学では学生の主体的な参画を促すための授業内容・授業方法の導入がある程度進んでいますが、今後専門分野の特徴、学生のニーズに照らして、更なる授業改善・工夫への取り組みが必要です。

②学生の勉強意欲を高めることも重要です。学生の勉強時間、特に授業の予習・復習、自主的な学習の時間を増やすために、入学時からの勉強習慣の確立、学習支援の強化、TA 制度・奨学金制度の充実などの取り組みが必要です。

③教員側は常に学生の学習の実態、変化、ニーズなどの情報を提供し、教育改善の取り組みにインセンティブを与えるために、学生の学習に関する情報のフィードバックを行い、教員の研究活動、FDなどの研究活動をサポートする体制の強化も不可欠です。

「中国における大学生の学習行動と大学の学習支援」

- 日時：平成 28 年 3 月 17 日 14:30～16:00
- 講師：竇 心浩（上海外国語大学 日本文化経済学院副院長）
- プログラム：1. 開会挨拶
2. 講演
3. 質疑・ディスカッション
4. コメント・閉会挨拶

はじめに、中国の高等教育の現状についてお話をいただきました。中国では大学進学者が増加傾向にあることから、多様な入学目的による入学者が増え、学力の低下などの問題を抱えています。一方で、情報や技術の発展に伴い、修得すべき知識はより高度化し、また、グローバル化による高等教育の国際競争の激化も相まって、学生が学習すべき内容は一層多様化しています。

このような状況の中で、学生がどの程度の学習時間を確保しているか、また、どのような学習意識のもと、知識の修得に励んでいるか。そして、それをサポートする学習支援方法はどのようなものが望まれているのかなどについて、学生調査の分析結果を事例に取り上げながら、紹介いただきました。学生の自律的学習時間については、成績上位層ほど熱心に取り組む傾向があります。また、学生の学習意識については、授業内容に賛同できるか否か、また、目標が明確であるか否かにおいて 4 分類され、成績上位層に関しては、自律的学習時間との関連性が見られ、授業内容に賛同し、かつ目標が明確な学生ほど、より多くの自律的学習時間を確保している傾向にあります。

続いて、多くの学生が学習を進める上で学習支援制度の充実を求めているという調査結果から、中国における学習支援制度について紹介いただきました。大学での適応能力確保を目的とした新入生向け導入教育、専門知識習得を目的とした在学学生への指導教員制度、そして、応用能力向上を目的とした学習支援制度などがあります。

特に、指導教員制度については、1 クラスまたは数名の学生を 1 名の教員が担当し、授業時間外に授業内容をはじめ学生の学習相談に応じているようで、多くの学生が活用しています。

本学では、授業内では大学院生などの TA による補助、授業担当教員によるオフィスアワーなどを実施していますが、指導員制度のように教員による学習支援制度があれば、学生にとって、学習を進める上でより意欲的に取り組めるだろうという印象を強く受けました。また、学習成果や学習支援に関しては、日本においても注目されており、本学の今後の学習支援制度のより一層の充実を進める上で、今回協定校の事例を学ぶことができたことはとても有意義なものでありました。

IR室、国際部から多数の参加者があり、活発な議論を行いました。

ワークショップ
中国における大学生の学習行動と大学の学習支援
IR室・国際部共催



講師：竇 心浩 氏 Ph.D (東京大学 教育学)
上海外国語大学 日本文化経済学院副院長・准教授
研究分野：教育社会学、高等教育学
学歴：1995年蘇州外国語学院日本語専攻卒業、1998年北京外国語大学北京日本学研究中心→日本社会専攻修士課程修了、2007年東京大学教育学研究科比較教育社会学コース博士課程修了教育学博士

日 時： 2016年3月17日(木) 14:30～16:00
場 所： 白山キャンパス 9号館2階 8203教室
対 象： 本大学の教職員

プログラム

司会：劉文君 (東洋大学 IR室)	
14:30～14:35 開会挨拶	高橋清隆 (国際部部長)
14:35～15:30 講演	竇心浩 (上海外国語大学日本文化経済学院副院長・准教授)
15:30～15:50 質疑・ディスカッション	
15:50～16:00 コメント・閉会挨拶	劉文君 (東洋大学 IR室)

(日本語)

支援」など 20 の研究発表部会に分かれ、そのうち IR 部会①と IR 部会②の 2 分会が設けられました。また最終日に、第 3 回 IR ワークショップ「執行部における IR への理解促進と IR の成果の学内へのフィードバック」が開催され、日曜日の夕方であるにも関わらず、参加者が多く、自大学の IR の現状・課題を踏まえ、意見交換など活発議論が行われました。

目を転じて、7 月 9 日(土)、7 月 10 日(日)に中国湖南大学で開催された国際フォーラム「IR と高等教育質的向上」及び中国 IR 学会年次大会について紹介します。大会では、約 600 名の会員が参加し、アメリカ IR 学会 (AIR) 前事務局長・EU の IR 学会会長・日本高等教育学会前会長及び

「台湾訪問団との交流会」

- 日時：平成 28 年 3 月 8 日 14:00～16:50
- プログラム：1. 開会挨拶 福川伸次 (学校法人東洋大学 理事長)
2. 講演 「現代高等教育と東洋大学」 竹村牧男 (東洋大学 学 長)
3. 講演 「日本及び東洋大学における IR の現状と課題」 劉 文君 (東洋大学 IR 室 准教授)
4. 事例紹介 「国際学部でのグローバル人材育成」 今村 肇 (東洋大学経済学部 教授) 荒巻俊也 (東洋大学国際地域学部 教授)
5. 事例紹介 「東洋大学の国際交流と留学プログラム」 丸山 勇 (東洋大学国際部 担当部長)
6. 来賓挨拶 工藤 潤 (公益財団法人大学基準協会 事務局長)
7. 閉会挨拶 王 亜新 (国際教育センター 副センター長)

今日、グローバル化、知識基盤社会化、18 歳人口の減少など様々な社会変化が取り巻く中、台湾の大学は激しい競争にさらされ、管理運営の改革・強化、教育の質保証・向上など、日本の大学と同じ課題に直面しています。これらの課題の解決に向けて、近年台湾では、教育改革を通じた高等教育研究の強化、IR 活動の展開、大学管理人材の育成といった取組が政策的に推進されています。上述の課題に関する日本の取り組みや経験について、視察および考察することを目的として、社団法人台湾評価協会が中心となり、台湾における各大学の学長・副学長を中心とする台湾訪問団約 30 人が来日し、本学の他に、東京大学、筑波大学、大正大学、國學院大學を訪問しました。

本学では 3 月 8 日、IR 室、国際部の共同企画のもと台湾訪問団との交流会を開催しました。日本における高等教育の現状を学ぶことを目的として、本学を取り巻く情勢に関する紹介も交えながら、台湾における高等教育の現状について情報共有を行いました。

はじめに本学を代表して、福川理事長より日本と台湾の経済的な協力及び高等教育の交流、本学と台湾の各大学との連携が一層強化されることに期待を込めてご挨拶いただきました。続いて、竹村学長より現代高等教育と東洋大学と題して、日本における高等教育政策が変化する中で本学の歩みと今後の発展について講演いただきました。

次に、大学経営における IR の役割を中心に、日本及び東洋大学の IR 活動の現状と課題について、IR 室劉准教授より紹介されました。また、本学の国際化の現状と今後の発展に関して、平成 29 年度新設予定の国際学部設置準備委員の荒巻教授及び今村教授より、新学部構想について説明いただくとともに、丸山国際担当部長より、本学の国際交流事業及び留学プログラムについて紹介いただきました。

最後に工藤大学基準協会事務局長、王国際教育センター副センター長よりそれぞれご挨拶いただきました。今回の交流会は本学と台湾の参加大学との教育改革・IR の取り組みについて情報交換にとどまらず、今後の教員、学生のより深い交流にも結びつく、大変有益なものとなりました。



国内における IR 活動の新動向

大学を取り巻く環境の変化に伴い、大学教育の質向上及び大学経営の高度化における IR が果たす役割がますます大きく期待されています。日本をはじめアジアの国・地域において、大学における IR 部門は急増しているだけでなく、IR 活動の現状・課題などについての調査・研究も増えつつあります。ここで筆者が参加した 2 つの学会年次大会及び現地調査から IR に関する取り組みについて報告します。

まず、平成 28 年 6 月 25 日(土)、6 月 26 日(日)に追手門学院大学で開催された日本高等教育学会大会については、300 名余りの会員が参加し、70 余りの研究発表が行われました。研究発表は、「経営・組織」・「大学教員」・「政策」・「学習成果」、「キャリア」・「質保証」・「学生

AIR 学会中国研究者分会会長を招き、中国 IR 学会会長が基調講演を行いました。「高等教育発展戦略と評価」・「カリキュラムの再構築と教学改革」・「大学生の学習と成長のモニタリング」・「IR 研究の理論と方法」の 4 分会が設けられ、計 20 名の研究が選ばれ、研究発表を行いました。

また台湾での調査から、近年教育の質的改善および大学経営力・国際競争力の向上を目指して、IR の設置が大いに推進されていることを明らかにしました。今年 4 月末の時点で、IR 室(センター)を設置した大学は約 7 割近くに達しています。また、IR 担当者に占める博士と修士学位を有する者はそれぞれ 4 割強を占めています。台湾の大学における IR 組織整備の素早さ、高度化から IR への期待の高さが伺わ

れます。

日本において、高等教育研究者を中心に IR に関する理論研究を行い、大規模学生調査の展開、IR コンソーシアムの結成など多くの実績が蓄積されています。高等教育グローバル化の中、日本における IR は欧米だけではなく、アジアの IR との交流も一層高める必要があると思われます。

本学では、スーパーグローバル大学創成支援事業の一環として掲げた今年度高等教育研究センターの設立にむけた歩みを進めるとともに、IR 室においても、IR 室運営委員会専門部会を設け、高等教育の課題などについて議論を進め、IR 活動のより一層の活発化を目指してまいります。(編集子)

▶▶▶ IR室運営委員会

- ① 平成27年度第4回 日時 平成28年3月9日 11:50～12:25
- ② 平成28年度第1回 日時 平成28年5月18日 12:30～13:40
- ③ 平成28年度第2回 日時 平成28年6月15日 12:40～13:40
- ④ 平成28年度第3回 日時 平成28年7月20日 13:00～13:45

▶▶▶ 学内委員会等での報告

● 学長室会議報告

- ① 「在校生アンケート調査分析（1）」（平成28年3月16日）

● IR室運営委員会報告

- ① 「学生の所属学部・学科への満足度（学科・学年別）についての分析—平成27年度『在校生アンケート』結果から」（平成28年5月18日）
- ② 「台湾における高等教育の現状と課題—財政改革を中心に」（平成28年5月18日）
- ③ 「平成27年度卒業時アンケート調査結果分析（1）—前年度との比較・満足度の規定要因分析」（平成28年6月15日）
- ④ 「平成27年度『在校生アンケート』結果分析（1）—学生の所属学部・学科への満足度及び規定要因」（平成28年6月15日）
- ⑤ 「学生の学習時間に関する分析—平成27年度在校生アンケート」（平成28年7月20日）

● 学部長会議報告

- ① 「平成27年度卒業時調査結果分析（1）—前年度との比較・満足度の規定要因分析」（平成28年6月17日）

▶▶▶ ワークショップ・国際交流会

- ① ワークショップ IR室・国際部共催講習会「中国における大学生の学習行動と大学の学習支援」（平成28年3月17日）
（講師：上海外国語大学日本文化経済学院副院長 竇心浩）
- ② 国際交流会 IR室・国際部共催交流会「IRの現状・課題に関する台湾訪問団との交流会」（平成28年3月8日）

▶▶▶ 国内外学術発表・調査研究

● 学術発表

- ① 「日本におけるIRの機能に関する分析—IR組織の設置との関連に着目して—」日本高等教育学会（平成28年6月）
- ② 「アジアにおけるIRの現状と果たす役割—日本と中国大陸・台湾との比較」国際フォーラム及び中国IR学会年次大会（平成28年7月）

● 調査研究

- ① 東京大学・筑波大学・早稲田大学・大正大学におけるIR人材育成及びIR活動に関する調査研究（平成28年3月）
- ② 台湾におけるIRに関する調査（平成28年6月）

▶▶▶ ファクトブック作成

▶▶▶ IR室運営委員会委員

- 竹村 牧男（学長、IR室長）
- 神田 雄一（副学長、教務部長）
- 北脇 秀敏（副学長、自己点検・評価活動推進委員会委員長）
- 小林 秀年（副学長、学生部長）
- 劉 文君（IR室准教授）
- 林 邦男（学長室長）
- 高橋 清隆（国際部長）